

菅波 茂

7月26日、香港を見渡す香港大学医学部のキャンパスで第27回アジア医学生会議が開かれた。私は主催者のアジア

医学生連絡協議会(AMSA)創設者として招待された。アジアの10カ国から400人の医学生が参加して、会議、講義、プレゼンテーション、病院見学、交流会など多彩なプログラムが活発に実施されていた。

子どものような医学生たち「私が創設した団体がこのように成長したことは非常にうれしい。世界の平和のために、相互扶助の精神でAMDAと一緒にプロジェクトを実施できることを楽しみにしている」とお祝いのスピーチをした。

1979年、医師だった私は2人の岡山大医学部生とともに、カンボジア難民救援の

ためにタイ・カンボジア国境のカオイダン難民キャンプを訪れた。医療支援を行いたかったが、善意だけでは何もできなかつた。国連難民高等弁務官事務所をはじめとして、誰も機会をくれなかつた。

何をすべきか。将来の国際協力のためには医学生らのヒューマンネットワークが必要だと思つた。この趣旨で80年に日本、タイ、インドそしてシンガポールの4カ国からの医学生の参加のもと、バンコクのマヒドン大学で第1回アジア医学生会議を開催した。志のある後輩によって毎年国際会議は開かれた。しかし、私自身が直接に関与したのは第7回の香港会議までだった。

今回の会議への参加はまさに20年ぶりだった。感無量だった。一緒に同行した妻もうれしそうだった。「あの学生たちの集まりがここまで成長したなんて。初期に活躍し

ていた各国の医学生たちの顔を思い出すわ。彼らはどうしているのかしら。きっと各国で活躍しているわ」と。

第27回アジア医学生会議に参加

04年12月25日、AMSAインターナショナル議長で、インドネシア医学生のナナという女性がわざわざ岡山から参加した。「おう！天は我を見捨てず」とつくづく感じた。

AMSAとAMDAの創設者が同じ人物だと分かつたからだ」と。その日は、大阪で開催された第18回東アジア医学生会議に参加する前日だった。

会議当日の26日にスマトラ島沖大地震・津波が発生した。AMDAは直ちに、10カ国の支部からインドネシアのバンダアチェ、スリランカのカルムナイそしてインドのチェンナイに多国籍医師団を派遣した。同医学生会議にも連絡して協力を依頼した。

ら多数のボランティアチームをバンダアチェに派遣し、AMDA多国籍医師団の医療活動に不可欠な通訳やロジスティック(後方支援)の活動を開始してくれた。AMSAの日本代表の医学生1人も大阪から参加した。「おう！天は我を見捨てず」とつくづく感じた。

第27回アジア医学生会議においてAMSA執行部からAMDAに対して相互協力の要望が出された。お互いに担当者を決めて、交流と共同プロジェクトを推進しようという提案だった。西団体の創設者である私にとって天からの贈り物である。そうでなければ何であろうか。3年後のAMDA発足25周年に向けて、「困った時はお互いさま」の相互扶助の精神を世界に発信し続けていく新たな枠組みづくりに挑戦してみたい。

ナナ氏は会議終了後、インドネシアに帰国するやいなやAMSAインドネシア支部か

(AMDA代表)

―題字は筆者